**大久保　景造 （おおくぼ・けいぞう）**

**１、プロフィール**

詩人・画家。昭和31年２月に詩誌「アポロ」創刊（「義眼」→「あるふあ」と改題）。昭和44年に文化庁主催の芸術祭参加の合唱曲「五つのピエタ」（間宮芳生作曲）を作詩。

＜生没＞

1936（昭和11）年８月20日～2006（平成18）年12月３日

＜代表作＞

昭和38年12月10日あるふあ詩社発行の詩集『ぼくものがたり』・昭和53年９月１日発行の詩集『冷え枯れ』自刊。

＜青森との関わり＞

八戸市に生まれ、八戸市に住み続けている。同人詩誌主宰・合唱曲の作詩・オペラ脚本・絵画講師等として活躍。

**２、作家解説**

昭和11年８月20日、八戸市長横町に生まれる。４～６歳まで、北村家 （第３代八戸町長の北村益、長男は脚本家の北村小松）に礼儀作法を教わるため預けられる。八戸高校を卒業後、上京して半年ほど牙塾に通ったが、胸を患って３年間の闘病生活を送る。昭和33年７月から八戸市の繁華街でジャズ喫茶〈車門〉を経営。

昭和31年２月に工藤孝二・武部克己等とアポロ詩話会を結成。詩誌「アポロ」主宰。32年７月から「義眼」と改題。33年５月から38年10月まで「あるふあ」と改題。詩画展等も開催。33号で休刊。62年９月に復刊し、平成３年９月通刊49号で終刊。また39年６月に詩誌「くるーと」を創刊するが、１号だけである。

昭和38年12月10日にあるふあ詩社のあるふあ叢書１号として詩集『ぼくものがたり』を発行。「私は多くの賛成者よりも、１人の共犯者の方がほしい」と述べている。53年９月１日に自刊で詩集『冷え枯れ』を発行。一切の無駄を省いた「冷え枯れた美しさ」を求めている。

昭和44年に文化庁主催の芸術祭参加作品の合唱曲「五つのピエタ」（間宮芳生作曲）の作詩をする。翌年に日本ビクターよりレコード化される。テーマは是川出土品・えんぶり・墓獅子・ナニヤドヤーレである。また昭和55年12月23日に八戸市公会堂で上演された創作オペラ「炎の中の炎の心」の原作・脚本を執筆。

昭和32年にモダンアート協会展に初出品して入選。３年連続入選。36年に創造美術会展で湯川氏賞を受賞して会友となるが、翌年に退会。その後は個展を中心に活動。故郷の萱葺きの家やえんぶり・花・壺の静物等をモチーフに、細密に描写する具象作家として活躍し、独自の世界を展開した。

昭和46年に八戸市文化奨励賞受賞。平成９年に岩手県遠野市文化功賞受賞。また八戸美術連盟評議員等を歴任。平成18年に八戸市文化賞を受賞。

**３、資料紹介**

〇『ぼくものがたり』

図書

1963（昭和38）年12月10日

265mm×255mm

昭和31年に八戸市で設立されたアポロ詩話会（→あるふあ詩社）のあるふあ叢書１号である。昭和33年から38年までの作品31編が収められている。〈ぼくものがたりひそかによむひとありがとう〉と結ぶ。「わかれ」の１行目は〈あけがたふたりは海になる〉である。